

館林キリスト教会 デポジションノート（2008年）

6月 1日 今日の通読箇所 ヨブ記 25章1～6

「天の軍勢」

「天の軍勢」とは天使の軍勢の意味に用いられることもあるが、ここでは宇宙、天体のことである。神の造り治め給う天体は数えつくすことができない。太陽、月、星などは誰ひとりその輝きを仰がない者はなく、その光に浴さない者もない。しかしすべての作者である神の目には、宇宙が格別偉大とも、太陽が特に輝かしいとも、また月が清明ともうつらないだろう。ましてうじ虫のように小さく不潔な人間が、どうして神の前に清く価値あるものと言えようか。

6月 2日 今日の通読箇所 ヨブ記 26章1～14

「神の絶対性」

ヨブと三人の友人の議論はまだまだつづく。すべて神様にかかわる議論だが、それぞれの研究、知議、体験を通して知り得た神について、はてしなく議論がつづくのを見れば、いずれもりっぱな神学者なのだ。ここでヨブは言う「我々の知るところは、神にゆく道の端にすぎず、その道はまだ遠く長い。我々が神について聞くとしても、それはほんの神のささやきにすぎない。神の力のとどろきということになれば、誰がそれを知り得よう」と。いまヨブは「わが魂は黙してただ神を持つ」という心境なのだろう。

6月 3日 今日の通読箇所 ヨブ記 27章1～23

「むなしさ」

「むなしさ」「はかなさ」というものは、神にそむいて生活している人間の、基本的な運命である。結局、最後の死と滅亡をまぬかれることができないからだ。「銀をちりのように積んでも」最後には他人の物となる。りっぱな家を建てても「くもの巣」のようにはかない。まるで、収穫がすむと簡単にとりこわす畑の「番人小屋」のようだと。エジプトにある、ボロボロ角の欠けた、ばかでないピラミッドや王の墓も、盗賊に荒らされてほこりだらけで、また同じ運命を示している。

6月 4日 今日の通読箇所 ヨブ記 28章1～14

「ゴールドラッシュ」

昔でも金や銀の鉱脈を掘り当てようと、一獲千金を夢見て危険を恐れない、いわゆる山師がいたものとみえる。ヨブ記のこの部分は昔の鉱山で鉱石を発掘する作業の、めずらしい描写だ。しかし人生において、金銀よりもっと大切な、真実の知恵について、そんなに熱心に捜し求める者はなかなかいない。おまけ

にそれは金銀よりもっと見付けにくい。ただ神様の恵みによってのみ、人はそれを得ることができるのだ。真実の知恵とは何か、それは最後の[28 節]に書いてある。

6月 5日 今日の通読箇所 ヨブ記 28章12～28

「知恵と悟り」

人間は金銀や宝石を一生懸命に捜すが、本当の知恵を求める人、それを見つける人は少ない。ただ神様だけが私たちを知恵に導き知恵を与えて下さるのだ。その本当の知恵について「主を恐れることは知恵であり悪を離れることは悟りである」[28 節]と記されている。反対に「愚かな者は心の内に『神なし』と言い、その心は腐れている」(詩14篇1)「愚かな者は戯れ事に罪を犯しその希望は絶える」(箴言10:23)などのみ言葉もあるのだ。

6月 6日 今日の通読箇所 ヨブ記 29章1～20

「清福」

「清貧」と言う言葉は割合に人に知られている。同じように「清福」つまり、りっぱで清潔な幸福というものもある。ここでヨブは、神の試みに会う前の幸福だった日々のことを懐かしく思い起している。あの幸福な生涯の秘訣は[3 節]にあるように「神のともしびがヨブの頭の上に輝き、その光によってヨブが歩んでいた」からだった。いま暫くヨブは、神の試みの苦難に耐えなければならない。しかしそれは長いことではなく、ヨブにはふたたび以前に勝る「清福」の日を迎えるのだ。

6月 7日 今日の通読箇所 ヨブ記 30章1～15

「立場の逆転」

[1～8 節]にはその当時の、家も持たずに放浪する、もっとも貧しく気の毒な人々が出ている。しかしその人々さえ、ヨブがいま神の祝福を失って貧しくなると、今度は大喜びでヨブをあざけり馬鹿にする。だが人の運命の浮き沈みもまた神のみ手のうちにある。くやしかりうがヨブよ。信仰をもって忍耐しなさい。「人の歩みは主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる」というみことばもあるではないか。

6月 8日 今日の通読箇所 ヨブ記 30章16～31

「応えられぬ祈り」

[20 節]「わたしがあなたにむかって呼ばわっても、あなたは応えられない」これもまたクリスチャンが時々経験する嘆きである。子供が母にむかって、毒になる食べ物、危ない玩具などを求めても、母はその求めには応えてくれない。実はその応えないことが、母の愛と知恵の応えなのだ。今ヨブは試練の時だか

ら、試練の時期が済むまで、神様はヨブの祈りを無視されるように見えるが、今こそ、もっともヨブの信仰と忍耐が必要な時だ。

6月 9日 今日に通読箇所 ヨブ記 31章1～12

「目との契約」

キリストは山上の説教で「目は体の明りである。だから、あなたの目が澄んでいれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ全身も暗いだろう」と教えられた。いまヨブは自分の目と契約を結んだという。多分「わたしの目よ。お前は見るのが仕事だ。わたしはお前を守り、大切にすることを約束する。そのかわり、目がわたしの罪のきっかけになどならないよう、はっきり約束契約してくれ」というようなものであろう。

6月10日 今日に通読箇所 ヨブ記 31章13～23

「しもべ、はしため」

むかしから「主人は無理なものと思え」ということわざがある。主人、社長、金持ちその他の有力者は、つい知らず知らずのうちに、目下の者、無力な者に対して無理をし、相手を泣き寝入りさせることがある。相手は口答えも苦情も言いにくくて「めんどうだから、だまって主人の言うとおりにしておけ」ということになりやすい。13：14、をみると、ヨブは以前主人だった頃、その点にもずいぶん注意していたようでりっぱだと思う。

6月11日 今日に通読箇所 ヨブ記 31章24～40

「良い記憶」

ヨブは苛酷な試みがつづき、心身ともに弱りはてたいま、死を思い、またあらためて自分の生涯をふりかえるのも自然である。ヨブには積極的に罪をおかし、神のみ心をいため、また人に迷惑をかけた記憶がないらしい。それなのにこんなみじめな状態で死ぬのは不本意ながら、しかし苦しみや死のなかでも、これらの「良い記憶」は、ヨブの心の満足であり、慰めであったにちがいない。わたしたちも同じように、おのれの生涯を、つねに喜びと確信をもってかえりみる者でありたい。

6月12日 今日に通読箇所 ヨブ記 32章1～14

「正義と罪」

若いエリフは、いままで遠慮していたが、ヨブと三人の議論が平行線でちがいがあかないので、たまりかねて発言することになった。ヨブは人間の中では比較的正しい者だという確信をくずさない。それなのに受けている苦しみは特別なものだから、これは罪のむくいではなく必ず別の意味があると言う。三人は、ヨブは罪人の分際で傲慢にも神にむかって自分の義を主張すると言う。とても

話は噛み合わない。ではここでエリフはなんと言うか。

6月13日 今日の通読箇所 ヨブ記 33章1～18

「神は語る」

13節に「神の語りかけ」のことが言われている。神は聖書により、キリストにより、教会により、牧師により、また多くのクリスチャンによって、つねに人に語りかけておられる。時には夢、時にはできごとをとおしてさえ、み心を人につたえようとされる。そのみ心はただひとつ、キリストによってすべての人が救われることだ。この愛にみちた神のことばをむなしく聞き流して、そのために滅びることがないようにしよう。

6月14日 今日の通読箇所 ヨブ記 33章19～28

「病苦」

ここに書いてあるように、病気は本当に苦しく、不安で恐ろしいものだ。しかし同時に、人が病気によって謙遜真実となり、反省と祈りの機会をえて救いにもちびかれることが多いのも事実だ。だから時には「病気は灰色の天使だ」などとも言われるのである。また神さまは祈りにこたえ、病気をいやしてくださることが多い。いずれにせよ神さまが摂理のうちに、病気さえも祝福に変えてくださるのはすばらしい。

6月15日 今日の通読箇所 ヨブ記 34章1～15

「正しい選択」

「正しいこと」と「悪いこと」とはわかりきっているようだが、微妙なケースになるとわからなくなり、案外迷ったり、議論になったりする。その場合まず第一に必要なのは[4節]にあるように、必ず正しいことを選び実行する決意だ。それから祈りつつ、考え、聖書を読み、あるいは話し合っただけで、きっと「われわれの間の良いことの何であるか」は明らかになるだろう。「猶予、孤疑は至誠の足らざるなり」と西郷隆盛も言っている。

6月16日 今日の通読箇所 ヨブ記 34章16～30

「政府の役目」

悪人が自由にはびこり社会秩序が乱れれば、人間が生活できないだけでなく、伝道もおこなわれず人も救われない。それゆえ神は政府を立て、社会秩序を守らせたもう。もとよりそれは摂理であって、政府自体はそんなことは二の次で権力闘争にふけっているから、ずいぶん神の目的に外れた悪政府も出てくるが、しかし政府自体が社会秩序を破壊するようなことになれば、それは長くはつづかず、必ず神の摂理のうちに、別の政権と入れ替わる。[30節]はその真理をしめしている。

6月17日 今日の通読箇所 ヨブ記 35章1～16

「十分な議論」

我々のように短期で結論を急ぐ人間がヨブ記などを読むと、繰り返しが多く、くどくて長たらしいのは驚きだ。昔の田舎会議などでは、村中の人を楽しみに集って、飲み食いしながら幾日もしゃべっていて、なかなか本題に入らない。しかし実はその間に、たくさんの事例と、意見というよりも、それぞれの人間の気持ちが暗示されるから、表決などなくても、リーダーが民意を知ってそれに合う政治をするにはこれが一番なのだそう。不合理のようで案外合理的なのが面白い。

6月18日 今日の通読箇所 ヨブ記 36章1～14

「神の怒りの貯金」

「心に神を信じない者は怒りをたくわえる」とあるが、神を知らぬ人間は毎日せっせと罪を犯し、悔い改めることもせず、罪の責任、罪に対する神の怒りを蓄積して、最後にその支払い、すなわち神の審判を受けるのだ。働かない日、もうからない日はあっても、罪を犯さない日はない。我々はそれを知って、日々謙遜、真実に悔い改め、それが罪を追い越すようであればならない。

6月19日 今日の通読箇所 ヨブ記 36章15～26

「逆境の祝福」

人は誰でも生活が順調、幸福であることを望む。しかし季節に秋も冬もあるように、そしてそれもまた必要、大切であるように、時に人は逆境を経験する。「神は苦しむ者をその痛みによって救い、彼らの耳を逆境によって開かれる」とあるのは、逆境もまた神の摂理、祝福であるという事実を示すのである。おそらくクリスチャンは誰も、試みによる信仰と人格の訓練、また成長を経験して、このみ言葉が真理であることを理解している。

6月20日 今日の通読箇所 ヨブ記 37章1～20

「神のみわざ」

「ヨブよ。立って神のくすしきみわざを考えよ」ヨブと友人の議論は果てしなく続くが、いまヨブは、人事の考察、人間の議論を打切って、立って神を仰ぎ望み、むしろ大自然に現れた神の不思議なみわざを思うべきだ。雨も降り嵐も吹く。天地が氷結したと思うと今度は、南風が吹いて、ヨブの衣服さえ暖まってくる。ヨブよ、議論より、むしろそれを思え。詩篇にも「静まってわたしが神であることを知れ」と記してあるではないか。

6月21日 今日の通読箇所 ヨブ記 38章1～15

「語りかけたもう神」

果てしもなく議論を続けるヨブとその友人たちに対して、いよいよ沈黙を破っ

て神が語りかけてくださる時が来た。神はここで、壮大な大自然のスケールとその経営の神秘をお語りになり、人間の微小無知を悟らせて下さる。自然界も摂理も、全能の神のわざであって、とても人間にその全部は分らないのだから、それについて考え、悩み、議論することは止めて、無条件に神を信じ、委ね、従うのが、そもそも信仰の本質ではないかと。

6月22日 今日の通読箇所 ヨブ記 38章16～38

「美しき天然」

「もろもろの天は神の栄光を現し、大空はそのみ手のわざを示す」と詩篇に歌われ、ゲートも「自然は神の衣装だ」と言っている、自然界ほど壮大で美しいものはない。もともとヨブ記は、深刻な哲学的議論に満ちた聖書だが、ここからしばらくは神がみずから述べたもうた、自然描写、自然賛歌がつづき、聖書の中でも名文中の名文で、わたしなどはむかしから、朗唱して倦むことを知らない。最も魅力ある聖書の部分のひとつなのだ。

6月23日 今日の通読箇所 ヨブ記 38章39～39章12

「自然動物園」

パンダやコアラを飼育し繁殖させるために、動物園がどんなに苦労しているか、日本では子供でも知っている。いま神はヨブと友人たちの目を、神の経営する世界動物園に向けさせる。丘にも砂漠にも、川にも海にも、大空にも、一滴の水の中にさえ、神の造り養いたもう動物、生物が満ちている。これも人知をはるかに越え、人力の及ばない範囲だ。その微小な人間が試みに会うとすぐ、神のみ心が分らないの、その愛を疑うなどと言うのだ。

6月24日 今日の通読箇所 ヨブ記 39章13～30

「動物の写真」

動物はあるいは勇ましく、かわいく、または珍妙でそれぞれ魅力があり、昔から絵や彫刻や芸術写真のテーマになっている。ここには何となくとぼけてユーモラスなダチョウ。勇ましい軍馬。猛々しく、しかも孤独で神秘的な鷲の記述がある。これら聖書的名文の表現力に較べれば、絵画も彫刻もなかなか及ばない感じだ。しかもこれはただの芸術などではなく、創造者の偉大と人間の微小を、ヨブに実感させるための神の語りかけなのだ。

6月25日 今日の通読箇所 ヨブ記 40章1～24

「河馬(かば)の顔に水」

今までの長いヨブと友人の論争は「全能者と争い、神と論ずる」趣があった。しかし、いまヨブは悔い改めて口を閉じ、ただ神に対する絶対の信仰と無条件の服従を告白するに至ったのであった。ここに河馬が出てくるが、彼は戦車の

如く強いのに、平和と無為を愛して水中に潜り鼻づらだけ出している。そのかわりヨルダン河が顔に注ぐともびくともせず、頑然として無為にとどまる。羨ましい奴だ。

6月26日 今日の通読箇所 ヨブ記 41章1～34

「自由の典型ワニ」

最後に出てきた動物はワニである。ワニは人間などをせせら笑い、力に物を言わせ、敏捷に自由に暴れまわる。昔の人間にはとても手に負えない存在で、つかまえてワニ皮のハンドバッグを作る気力などは、とても当時の人にはなかったのだ。そのワニもまた、神が造り養い守りたもう被造物の一つなのだと思います。世界も歴史も人間の運命も、支配したもうのはただ神のみであるという真理は、いまはヨブの目に明らかだった。

6月27日 今日の通読箇所 ヨブ記 42章

「ヨブの沈黙」

ヨブが苦難に会い、また友人との議論の間、神は不思議に沈黙していた。しかしいまは、ヨブに信仰と服従の沈黙が来た。ここでヨブの信仰は完成し、神は訴えるサタンにお勝ちになったのである。この試練は約2年間で、神の恵みによってヨブは再び家族財産など、一切の所有を回復した。ヤコブの言葉のように「ヨブの結末」をみれば「主の慈愛とあわれみの富」がわかるのである。これで随分長く交読を続けてきたヨブ記も終わりました。

6月28日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 1章1～8

「信仰による忍耐」

2節の「いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい」というお言葉は、一般の考え方に逆行しています。ローマ人への手紙5章3、4節にも「...患難をも喜んでい。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである」とあり、信仰による忍耐は錬達、希望に繋がるとあります。錬達とは円熟した性格、試験済みの信仰と、試練を経た真実を意味します。人生において、試練や患難を避けられないとしたら、秘訣は、信仰による忍耐を持って歩み続けること、と教えられます。ヨセフは遭遇も人格もキリストに最も似た人と言われます。試練を通して彼に円熟した人格が与えられたからでしょう。「十分に成長を遂げた人」それが4節の意味です。

6月29日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 1章5～11

「神からの知恵」

ヤコブの手紙は、初代教会をつくり上げてゆく過程にある時代に書かれました。

だんだんとキリスト教会が成立し、前進してゆこうとする時、当然のように迫害の手が伸びてきました。そして、様々な試練が当時の教会の人たちに及んだのです。その試練の中で、ある人たちには神様を疑う気持ちが起こってきたのです。そうした試練への対処の仕方について教会に送られた手紙なのです。そこでヤコブは、聖霊に導かれつつ「とがめもせず惜しみなくすべての人に与えられる神」(5節)に知恵を願い求めるようにと勧めたのです。なぜなら、こうした状況は皆が「神からの知恵」を与えられなければ、乗り越えることが難しいからです。

6月30日 今日を通読箇所 ヤコブの手紙 1章12～18

「誘惑に関する教え」

神様が試練を送られるのは、私たちの中に忍耐を生じさせ、成長させるためですが、人を誘惑して、信仰と人格を訓練するということはありません。ヤコブは、ここで誘惑に関して3つのことを教えています。第一は「だれでも誘惑に会う」(13節前半)ということです。イエス様でさえ誘惑に会われました。自分は大丈夫などと思うのはとても危険で、常に信仰の武装をしていなければなりません。第二は「神は...誘惑...なさない」(13節後半)ということです。だから誘惑に会った時、信仰によって神からの力をいただいて、サタンに勝利することが大事です。第三は「誘惑を甘く見るな」ということです。それは結果的に死を生むことになるからです。15節には「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」と書いてあります。だから私たちは誘惑に対して「思い違いをしてはいけない」(16節)のです。